

## 本学の取組紹介 「鳴門教育大学大学院コアカリキュラム構想」

報告者 鳴門教育大学 社会系教育講座 准教授 草 原 和 博

どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは本学の取組み,「教育の専門職養成のためのコアカリキュラムー地域との連携を通して院生の授業力向上を図る大学院改革ー」について御説明いたします。

なお,あらかじめ補足いたします。専門職GPというのは,以前の教員養成GPを引き継いだ制度でありまして,必ずしもこの教職大学院だけをターゲットにしたものではないことであります。また本報告にあわせまして,お手元にあります水色で製本されました別冊資料,その中の「本学の取組み紹介」の該当ページを御参照いただけましたら幸いです。

※

では,まずなぜ今回の取組みが始まったのか,取組みの背景から説明いたします。本取組みの背景には,本学大学院が直面する三つの課題がありました。

まず第1に,教職大学院が開設されるなか,既設大学院の機能をいかに活性化させるかであります。来年度から既設の3専攻250名に対して,教職大学院定員50名の新組織が立ち上がります。しかし,この数字が物語りますように,本学学校教育研究科の構成員は,依然として既設大学院の院生が多数を占めております。すなわち,二つの組織が一つの研究科の中に並立することで,教職大学院とは異なる,既設大学院ならではの教育の専門職養成のあり方,その目的が問われることになりました。

第2に,学問,芸術の専門的知見と教育現場の課題を架橋する教育をいかに実現していくかであります。別冊資料の資料<sup>1</sup>をごらんください。既に大学院では,過去6カ年にわたり行われて来ました「教育実践研究」という科目がございますが,そこでは当初の理念とは裏腹に,近年,教員の個別的な関心に応じて多種多様なテーマが乱立し,ねらいが拡散する傾向が見られます。このテーマの乱立・個別化に伴いまして,院生の学びの質にも,選択するテーマによって格差が目立ってきました。さらには,これらの実践的科目と専門科目の連携の弱さということも指摘されております。そこで,既設大学院のカリキュラムの構造はどのようにあるべきなのか,現行のカリキュラムをいかに発展的に改善していくかが問われてきました。

第3に,院生のキャリア・問題関心・能力の多様化にいかに対応するかであります。現在本学の大学院には,以下三つの形態の院生が同時に学んでおります。一つは教員免許を持たない,大学院で初めて本格的に教育を学ぶ教員養成プログラムの院生,二つは既に教員免許は持ちますが,教育実習の経験程度を有するストレートの院生,三つ目は教職10年程度の教員経験豊かな現職院生であります。現在は,この3者の混成が一層進む傾向にあります。このような状況下で,大学院の授業として中堅層が求める高度な実践力と,若手に要請される基礎的な実践力というものを,いかに一つの授業の中で一体的に育成していくかが問われてきました。

以上、既設大学院の教育の目的・内容・方法にかかわる課題に対して、三位一体的な解決策を導こうとした、それが今回の専門職GPの取り組みであります。

※

次に、取り組みの内容について御説明いたします。

まず既設大学院の目的、位置づけに関わる問題に対しては、「教育の専門職」養成における二つのアプローチのうち、1つに特化するという考え方で対処することにしました。すなわち「教育の専門職」には、一つは、学校教育が直面する広範かつ多様な課題に対してリーダーとして適切に対応し解決できるスペシヤルな能力に裏打ちされたジェネラリスト、もう一つは専門的知見を生かして、授業や指導・相談ができる、教育に関するジェネラルな問題意識に支えられたスペシヤリスト、この二つの存立形態が考えられます。この両者が相補いながら、「学校」という組織が動いていくわけであります。そこで既設大学院では、教職大学院との機能の役割を分担していくために、後者のスペシヤリストの養成に特化するという戦略をとりました。

次に、既設大学院のカリキュラムの内容編成に関する問題。これについては、今日の教育課題に関してすべての院生が共通に履修するコアカリキュラムを設置することで、教育に関するジェネラルな問題意識に支えられたスペシヤリストの養成を実現しようとしてしました。すなわち、大学院段階ですので、基本的には歴史学、生理学だとか、物理学・英文学など専門的科目を中心に研究を進めますが、そこで培ったスペシヤルな知識・技能を活かしながら、今日の教育課題を思索、解釈することも要求していきます。その場が「コアカリキュラム」であります。コアカリキュラムは、今日の教育課題を総合的・横断的にとらえ、大学を拠点にして課題研究に取り組む「広領域コア科目」と、今日の教育課題を教科・領域の視点からとらえ直し、教育現場と大学との往還を通じて課題に取り組んでいく「教育実践フィールド研究」から成り立ちます。

これら二つのコア領域を通して、教育に関するジェネラルな問題意識を培った上で、それを専門科目の学習や修士論文の作成に結びつけていくように期待します。すなわちミニ文学研究科、ミニ理学研究科からの脱却であります。

コアカリキュラムの一つ、「教育実践フィールド研究」では、現在の実践研究に見られるようなテーマ乱立の傾向に歯どめをかけるため、可能な限り、取り組むべき課題の精選と構造化を図ります。すなわち、一つの教育課題を複数のテーマからとらえ直し、さらに一つのテーマについて、四つの教科・領域の目的視点から解決策を模索させようとしています。

例えば、以下のようなイメージになります。

例えば、「他者を思いやる心を育てる」というテーマに対して、人間形成コースの院生は、「優しさとは何か」を考える道徳の授業から解決策を追求させることができます。国語コースの院生は、「古典に描かれた人の生き方」ととらえる国語の授業から接近できるでしょう。社会コースの院生は、「社会福祉の思想と現実」という公民科の授業を通じて、社会的な相互扶助の問題に迫ることができます。技術・工業・情報コースの院生であれば、「インターネットにおける情報の受け取りと発信のリテラシー」を育てる授業から、情報化社会における思いやりの形を検討することもできるでしょう。このようにテーマを構造化した上で、それを院生に投げかけ、相互に交流させていくことで、教育課題のとらえ方・テーマへのアプローチのし方は、必ずしも一つではなく

複数あることを理解させるとともに、各教科・領域に固有な目標や教材解釈のし方というものをとらえさせることができます。

最後に、大学院生の経験値が多様化するなかで、高度な実践力と基礎的な実践力をどのように育てるか。この問題には「教育実践フィールド研究」を院生と院生、大学院と教育現場の対話の場として位置づけることで解決を図ります。具体的には先ほどのような、教育テーマにアプローチする院生チームを、教員養成プログラムの院生、学卒ストレートの院生、そして現職院生で構成される、5人から7人程度の共同体として組織することとします。若手の院生には、チームのなかで原理的な批判や行動力を期待するとともに、現職の院生には、経験にもとづく提言やリーダーシップの発揮を求めます。

このようなキャリアを異にする院生の混成チームを単位に、一つの教育テーマを1年半かけてじっくりと追求させます。また、ウェブポートフォリオも活用しながら、継続的な討論と内省を促すこととします。

「教育実践フィールド研究」のスケジュールとモデルシラバスの詳細は、資料<sup>3</sup>に示しました。M1からM2にかけて、パワーポイントの右側、赤で着色されています理論的な知識を学ぶ大学院における学習と、画面の左側、青で着色されている臨床的な知識を学ぶ協力校での学習を交互に繰り返し、研究を深めてまいります。最終的には、一連の学びの成果を「教育実践フィールド研究フォーラム」で報告します。優れた成果には学長賞等を授与し、顕彰いたします。

このような大学院と協力校、両者の直接的、ないしはウェブ上での交流と知の蓄積を通して、若い院生と現職院生、さらには教育現場の教員、この3者の関心に同時にこたえ、力量を高めていくことを目指します。

以上のように今回の専門職GPでは、既設大学院が直面する「教育の専門職」養成の①目的、②内容、③方法にかかわる三つの課題に対して、①教育に関するジェネラルな問題意識を備えたスペシャリストの養成、②教育実践フィールド研究における教育課題への専門的で構造的なアプローチ、そして③多様な経験と関心を持つ大学院生チームと協力校教員の共同研究、この三つの答えを導きました。これらを「コアカリキュラム」として具体化することで、課題の三位一体的な解決を図ろうとする試みであります。

※

以上のフレームワークに基づいて、来年度から立ち上がる「教育実践フィールド研究」を本格稼働させるために、現行の教育実践研究の中から四つのチームを選びまして、試行的な取り組みを行うこととしました。

一つは梅津先生を中心とする社会科の「教科目標」「授業構成」の研究。二つは草原を中心とする社会科の「内容構成」「教材開発」の研究。三つは山森先生を中心とする英語科の「内容構成」「評価計画」の研究。そして四つは長島先生を中心とする音楽科の「学習指導」「教材解釈」の研究であります。

これらの四チームには、「教育実践フィールド研究」を効果的に運用していく知見を得るため、「教育の専門職」養成にふさわしい目標設定とそれを達成する指導法の解明を託することにいたしました。

一つは教員の協働力。多様なキャリアの院生がチームをつくりながら、教育課題の研究に共同的に取り組ませる方法を、梅津・山森の2チームが検討いたします。

二つは課題の分析力。同一の教育課題に複数の視点・論点からアプローチし、多様な解決策を構想させる方策を、梅津チームが検討いたします。

三つは授業の開発力。先端的な学問・芸術と教育実践との架橋を図りながら、教育課題にこたえる授業や教材を開発させる方策を、草原・長島チームが提案いたします。

そして四つは実践の省察力。大学と現場が連携し、授業を実践し、実践上の成果や課題を絶えず省察していく、そういう方法論を、草原・山森・長島の各チームが模索してまいります。

以下、この4チームの取り組みと成果を順次報告してまいります。

ご清聴ありがとうございました。